

# バタイユの「聖なるもの」と言説の試みについて

——理性批判の観点から——

赤羽優子

G. バタイユの「聖なるもの」についての思想は、大きく三期に区切ることができる。少年期から棄教までの第一期、「無頭人」や「社会学研究会」などの共同体と社会活動の時期、無神学大全から晩年にいたる第三期である。さらに第三期は興味の対象を言説と文学とにわけることが可能と思われるが、明確な区切りをつけるのは困難であろう。本稿で主に取り扱うのは第三期、言説についての試みである。

バタイユにとって、「聖なるもの」は「体験」である。彼はその特性である瞬間性、非合理性を言説の面でも表現しようと試みた。だが、それは永続的、理性的な言説の特徴と自己矛盾を孕んでしまうことになった。

バタイユが試みた矛盾の解決は、必ずしも成功したとは言えない。どころか、それらは J-P. サルトルを初めとした知識人たちに誤読を誘発し、バタイユの思想自体を難解なものと思わせる要因になってしまった。けれども、その試み自体が無意義であったわけではない。本稿では言説と思想の矛盾に取り組んだバタイユの姿勢を、成果ではなく試み自体の意義に着目して取り上げ、彼の思想の大きな特徴のひとつである理性批判と照らしながら考察したい。

バタイユの「聖なるもの」は「内的体験」「至高の操作」などとも表される。それらは脱自による交流の体験の場であり、「通常、神秘体験と呼ばれているもの、すなわち、恍惚の、法悦の、少なくとも瞑想がもたらす感動の状態を意味するものである」(『内的体験』(G. バタイユ 出口裕弘訳、平凡社ライブラリー、1998年、21頁))。けれどもそれは特定の宗教や信仰体験に依拠するものではない。むしろ、おもにキリスト教で行われるような信仰告白を、バタイユは「聖なるもの」の本質を変質させたものと批判する。

バタイユはキリスト教を、「聖なるもの」を「神」として実体化したものにとらえている。人格を持った「神」の存在は未完的な人間の不足部分を補い、未知を既知の中へ押し込める。ここでの「神」は未知の領域を覆うための後ろ盾として表現される。そして「神」をすべての頂点に据えたキリスト教は、「神」とそれ

に祈る人々、という構図を作り出す。それは「聖なるもの」の本質である、脱自による自己と他者との交流を破棄させる構図である。こうしてキリスト教は「聖なるもの」を「神」の中へ押し込め、その本質を変容させてしまったとバタイユは考える。バタイユは「聖なるもの」を、非-知としてとらえ、その本質は決して知ることのできないものとする。

彼のこうした主張は宗教批判ではなく、合理的に「聖なるもの」を既知のもの押し込めようとする近代西洋の理性的態度への批判であろう。キリスト教が合理的、理性的な宗教であることは、R. オットーも『聖なるもの』の冒頭で、前提として述べている。バタイユの理性批判の態度はその幼少時代に影響を見ることができる。

一方、彼が有形態の共同体として結成した「無頭人」は頭＝指導者を据えない共同体であった。バタイユは第二次世界大戦を、指導者(独裁者)を「聖なる核」に据えた共同体として見ており、「無頭人」の名称には大戦に向かって進んでいく近代西洋への批判の意味もあったのだらうと推測される。そして頭に向かう共同体の構図は、彼が批判するキリスト教の「神」の構図ともよく似ている。バタイユが「聖なるもの」を非合理的なもの、瞬間的なものとして捉えようとする背景には、近代西洋に広がる理性主義、合理主義への批判が下敷きになっている。

バタイユは「無頭人」や「社会学研究会」で「聖なるもの」を理論的、実践的に試みるための共同体を提案したが、これらの有形態の共同体は開戦とともに解散を余儀なくされる。以後、バタイユは無形態の共同体を試みるようになる。その手段として選ばれたのが著作を著するという行為であり、言説の試みだった。

バタイユは瞬間的な「聖なるもの」の特性を、自らの著作にも持たせようと試みた。断章形式や突発的な詩、思いつくままに書かれた文章によって、読者との交流を試みたのだ。バタイユは『ニーチェについて』にて、読者に、好運に賭けることを呼びかける。だがその試みは「新しい神秘家」として批判され、誤解を

受けることになる。以後、バタイユは自らの著作が難解であることを気にかけるようになる。

バタイユは自らの著作が、多くの読者に理解されることを強く望んだ。だが同時に、失敗の根本的な要因はそこにあったのではないだろうか。なぜならば、理解するという行動そのものが理性の働きだからである。理性批判の特性を持った「聖なるもの」を、理性的に理解させるという枠組みが設定されている以上、その方法をいくら理性の外に求めたところで、理性の限界の内側を堂々巡りすることになる。

完全に理性を失った人間は「聖なるもの」を体験し続けることが可能かもしれないが、彼はそれを広めることができない。それは完全に閉じた世界である。二度の大戦を経験し、自らもその苦しみを味わったバタイユは、自身を孤独に完結させることを選ばなかった。自ら矛盾を犯す「有罪者」として社会へ叫び続けることで、共同体の理想を実現させようとしたのだ。それはひとつの社会の理想でもあった。

彼の言説は飽くまで、解体されつつある言説である。読者に、理性的に自らを振り返り、理性ではない交流の理想を語りかけるための言説である。そういう意味で、彼は哲学者ではなく思想家だったのだ。体系的な知識を求める知識人ではなく、バタイユは真昼にランプを持った狂人であり続けようとしたのだ。

結果的にバタイユの理想は広く人々に知れ渡ることにはならなかったが、自らの思想に誠実であり続けようとしたバタイユの姿勢自体は今日的にも意義を持つものであろう。バタイユの試みは、体験だけでなく、思想と言説との多様な関係の可能性を浮き彫りにしたと言えるのではないだろうか。

(大学院文学研究科修士課程宗教学専攻)